伸びゆく―石川・富山県産業界

市場ニーズ読み取り 新製品投入

さらなる発展を目指して石川・富山県産業界が攻勢を強めている。景気が緩やかに回復する中、新製品の投入や設備投資に力を入れる企業が出ている。能登半島地震の経験から災害時の用途を見据えたドローンの開発や、次世代のモノづくりを目指しデジタル変革（DX）に取り組む動きもある。一方で、社員第一を掲げ職場の環境改善に力を注ぐ企業も存在する。こうした取り組みで伸びゆく両産業界の企業を紹介する。

三協立山はカーポートの屋根材として「シルバーポリカーボネート板」を発売した。多様な住宅外観に調和する洗練されたデザインとマットな質感で高級感を演出。暑さの原因となる赤外線の熱量をカットし、スチール折板と同等の高い遮熱効果で車内温度の上昇を抑制。夏場のカーポートを快適にする。

夏の平均気温上昇や猛暑日の増加などで駐車時の遮熱ニーズが高まる中、同社は2年に「ブラックポリカーボネート板」を発売。これにアルミ形材色のサンシルバーに合わせた独自色をラインアップに追加し、バリエーションを充実させた。

新製品の消費税抜きの価格は96万4200円。ポリカーボネート板を屋根材に使用するアルミ形材屋根のカーポートと比べ価格を2割程度低減できる。パネル厚は1・8㌢㍍、開口5410㌢㍍×奥行5000㌢㍍×高さ2500㌢㍍。

ODC（富山県滑川市、大倉義憲社長）は、最大積載重量80㌔㌘の重量物運搬ドローン「X80」を4月以降に発売する。林業や山間部の工事・建設現場で対する資材運搬、災害による道路寸断で孤立した被災地への支援、物資輸送などの用途を想定する。消費税抜きの価格は、バッテリー5セットが付いた標準セットで約990万円の予定。

同ドローンは全地球測位システム（GPS）や電波が不安定な機体を安定させる「手動制御」を搭載せず、操縦者がエリア、過酷な現場で使用を想定する。自立飛行機能を搭載し、高い飛行安定性を確保した。

試作機のバッテリーを除く機体重量は41・1㌔㌘。最大積載状態での飛行時間は最大で約10分間、最大飛行距離は時速20㌔㍍で3㌔㍍。最大耐風速度は秒速7㍍。大容量バッテリーを交換しながら運用し、複数回往復することで1日2㌧の物資を運べる。

発売予定の機体は、両向きのモーターとプロペラで形成された二重反転方式ローター4本に分かれていたロータ搭載軸を1本に減らし、機体重量を37・6㌔㌘に抑えた。これにより、バッテリーを除く機体重量が41・1㌔㌘と同等になる。

同社は重量物運搬ドローンの操縦士を育成する講習にも注力。講習では操縦士に必要な知識を座学で学習するほか、最大積載重量の違う3種類のドローンを段階的に使い技術を身に付けてもらう。

このほど同講習の体験会を開いた。林業や土木建築関連、製造業など6人が参加し、座学や実際の操縦を体験した。同社の操縦士が X80で重量約60㌔㌘のインスタントハウスを運搬する様子を見学した。

ODCの重量物運搬ドローン「X80」

自動化、効率化投資盛んに

高品質、高精度のモノづくりを視野に省力化、自動化の設備投資を図る企業も多い。

新日本海重工業（富山市、真岩謙一社長）は大型のファイバーレーザー加工機と切断機を導入した。投資額は約5億5000万円。加工の自動化と省人化を進め、現場の人手不足を克服する。併せて工程能力と精度向上による見込む。消費税抜きの価格は、バッテリー5セットが付いた標準セットで約990万円の予定。

同ドローンは全地球測位システム（GPS）や電波が不安定な機体を安定させる「手動制御」を搭載せず、操縦者がエリア、過酷な現場で使用を想定する。自立飛行機能を搭載し、高い飛行安定性を確保した。

試作機のバッテリーを除く機体重量は41・1㌔㌘。最大積載状態での飛行時間は最大で約10分間、最大飛行距離は時速20㌔㍍で3㌔㍍。最大耐風速度は秒速7㍍。大容量バッテリーを交換しながら運用し、複数回往復することで1日2㌧の物資を運べる。

発売予定の機体は、両向きのモーターとプロペラで形成された二重反転方式ローター4本に分かれていたロータ搭載軸を1本に減らし、機体重量を37・6㌔㌘に抑えた。これにより、バッテリーを除く機体重量が41・1㌔㌘と同等になる。

同社は重量物運搬ドローンの操縦士を育成する講習にも注力。講習では操縦士に必要な知識を座学で学習するほか、最大積載重量の違う3種類のドローンを段階的に使い技術を身に付けてもらう。

このほど同講習の体験会を開いた。林業や土木建築関連、製造業など6人が参加し、座学や実際の操縦を体験した。同社の操縦士が X80で重量約60㌔㌘のインスタントハウスを運搬する様子を見学した。